



復元した土師器

地方（愛知・岐阜両県）など限られた地域でしか生産されていなかった須恵器（高温の登り窯で焼かれるもの）も少量出土しています。

今回の調査区の中では、土石流の中から土師器・須恵器が出土しました。これらは上流に存在した集落（または遺跡）を削り取りながら、流れ着いた結果と考えられます。最も新しい土石流の中には平安時代の遺物が含まれることから、平安時代以降にも土石流災害が発生したことが分かりました。



最も新しい土石流の中から出土した時期の異なる須恵器

（上段：古墳時代、下段：平安時代）



古墳時代の弓（長さ 59 cm）

中央部付近で折れています。端部には弦を張るための溝が彫られています。材質は今後、調べる予定です。イヌガヤなど、弾力性に富んだ素材が用いられることが多いようです。



勾玉（長さ 3.7 cm）

みどりいろぎょうかいがん  
緑色凝灰岩製。中でもへきぎよくとよばれる最高品質のものです。



## 4 まとめ

- 今回の調査区では、古墳時代中期～後期初頭（5世紀～6世紀初頭）の水田を検出しました。水田は、地形を利用しながら築かれていることが分かりました。
- 遺跡から約 500m 西側の丘陵上に位置する飯綱山古墳群や蟻子山古墳群（いずれも県指定史跡）が築造された時期とほぼ同時期と推定され、古墳築造に関連した人々が残した遺跡と考えられます。
- 当地を地震や土石流災害が相次いで襲っていることが分かりました。人々は、大規模な災害に見舞われながらも、当地に留まり、水田を復旧しています。当地に留まり続けた背景について検討することが、今後の大きな課題です。